

土木用語辞典編集委員会編
土木学会監修

土木用語辞典

書評者 矢野勝正*

このたび、土木学会監修で、コロナ社・技報堂の共同出版形式により土木用語辞典が発刊されたので一読してみた。結論をさきに述べると大変な努力の賜としてできあがったものだけに、非常に立派なものであるということである。土木用語と一口にいても広い分野にわたってのいろいろな言葉があり、時代のうつりかわりによって変化してきている。この辞典におさめられている言葉の数は約1万語の用語が、くまなく集められている。

土木用語の辞典のそもそものはじまりは、明治41年に刊行された英和工学辞典だそうであって、60年一昔のことである。それからいくたびもの改訂変遷があったが、両出版社が土木用語辞典編集委員会を組織し、土木学会の監修のもとに最近の新しい用語や当用漢字にくみかえて再編集にとりかかったのは10年まえのことである。爾来100名にあまる担当委員各位の努力で、今日まで数多い会合を重ねてこられたことに対して、心から敬意と感謝を表する次第である。この辞典の最も良い点は各用語に一応の定義が与えられていることである。用語は平時安易に使われていても、いざ正面きってほんとうの正しい定義となると、誰しもとまどうものである。私も時折新語を耳にすることが多いが、こなからは、この辞典を虎の巻にして大いに活用し、御利益にこうむりたいものと思っている。

それから、英独仏の訳名が付記されているのも大変便利である。それに加えて、英独仏の索引が付録として加えられているのも非常に便利である。ときどき英語の用語を知っていても、日本語のほうを忘れていたこともある。

この辞典の用語の定義づけにあたって、図面・写真などを豊富に使って、きわめてわかり易く説明されていることも、土木の専門家はもちろんのこと、一般の人々にもわかり易くて非常に良い点であろう。よく、一般の方から土木用語は古くさいとか、あまりにも勝手な専門語

を使いすぎるといふ非難めいたことを聞くことがある。たとえば「川倉」とか「きりは」とか、災害時に使う「増破」とかいった言葉が、土木屋には聞きなれていても、一般の人には何かかけはなれてわかりにくい。こうした意味からも、このような辞典が刊行されて、土木の知識が普及されることは大変結構なことである。いずれにしても、このような広い範囲の土木用語をくまなく集めて、しかも懇切丁寧な説明をつけられた編集委員各位の10年にわたるご努力は、大変なものであったであろうと思う。そして、このような権威ある辞典が、専門家のみならず多くの人々によって活用され愛用されることは、まことによるこぼしい限りで、良書の一つとして推薦する次第である。ただ、はたしてこれで完璧なものかどうか、というところと多少問題がないわけではない。まだ落ちている用語がないともいいきれない。定義が完全かどうかという点もないわけではないかも知れない。それはどの辞書にも大なり小なりありうること、今後みんなで改正していけばよいことである。私も一字一句精読吟味したわけでもない。技術は日進月歩でどんどん発展してやまない。したがって、新しい言葉や定義のしかたも変ってゆくから、それなりに修正加筆してゆけばよいのである。これは、編集者だけの責任ではなく、この辞典を活用される読者の声によって改良されてゆくことであろう。

コロナ社・技報堂刊、B6判・1421ページ、定価5500円

ご案内とお願い

本欄に収録されております書評または新刊紹介は、わが国で発刊された工学書を中心に書評小委員会が編集している欄であります。この編集作業のため、本欄を担当しております書評小委員会は、各方面の協力を得て、新刊書をもれなく集めるよう配慮と努力をしておりますが、未収図書が皆無とは申せない現状であります。とくに官公庁、会社などで非売品として出版されているものは、ややもすると洩れる恐れがあります。したがって、会員各位のご執筆・編集、もしくは関係されました図書が市販、非売品をとわず発刊になりました節は、ぜひとも書評小委員会へ2冊（ただし、うち1冊は土木図書館に備付）ご恵送たまわりたく、お願い申し上げます。なお、勝手ながらご身辺でこの種出版物が出版されました節は、このことをご伝言いただきたくお願いいたします。

土木学会誌編集委員会書評小委員会

* 正会員 工博 京都大学名誉教授